九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

中級レベルの日本語学習者における場所を表す格助詞「に」の習得に関する研究 ： 中国語を母語とする学習者を対象として

岡田，美穂

https://doi.org/10.15017/1785341

出版情報：九州大学，2016，博士（比較社会文化），課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

要　約

本研究は日本語学習者の場所を表す「に」の習得に関する研究である。第 1 章では本研究の目的が日本語学習者の場所を表す「に」の発達の 1 つの段階を明らかにすることであることを述べた。初級レベルの学習者には存在場所「に」と動作場所「で」の混同による誤用が現れる段階がある。この誤用が現れる段階の次の段階を知るためには中級レベルの学習者に現れる(3)「*クラスで 2 人韓国人がいる」(4)「*あの喫茶店にコーヒーを飲む」(5)「*寮にいません、大学でいる」(6)「*中国で、お盆のような日もある」の誤用が初級レベルとは異なる「に」と「で」の用法の混同によって現れた誤用であることを明らかにしなければならないと考えた。

第 2 章では先行研究を概観し本研究の立場を示した。

第 3 章では 3 つの研究課題を挙げ仮説を立てた。

〈1〉. 存在場所「に」と範囲限定「で」との混同により(3)の誤用が現れる発達段階があるか。

〈2〉. 移動先「に」と動作場所「で」との混同により(4)の誤用が現れる発達段階があるか。

〈3〉. 場所名詞が対比された場合に(5)が、場所名詞が文頭に置かれた場合に(6)が動作場所「で」とは無関係に現れる発達段階があるか。

仮説を検証するためには格助詞選択式テストの調査を実施した。

第 4 章では〈1〉を解明するために仮説の検証を行った。調査協力者は①国内の日本語学習者 61 人（「中級の下」、「中級の中」、「中級の上」）、②中国語話者で JFL 環境 179 人と JSL 環境 80 人、③韓国語話者 90 人である。①では日本語レベルが高くなるにつれ条件付存在場所「に」の正答率が U 字型を成した。U 字型の底辺に当たる「中級の下」と「中級の中」のデータを相関分析した結果、範囲限定「で」の正答率が上がると条件付存在場所「に」→「で」の誤答率も上がる関係が見られた。②と③は回帰分析した結果「中位レベル」に範囲限定「で」の正答率と条件付存在場所「に」→「で」の誤答率との間に有意な正の関係が見られたため①の U 字型の底辺に当たるレベルと解釈した。仮説は支持された。

第 5 章では〈2〉を解明するための仮説の検証として 3 種類の予備調査及び本調査（④中国語話者 49 人）を実施した。回帰分析の結果、移動先「に」の正答率と動作場所「で」→「に」の誤答率との間には有意な関係が見られ、他方、存在場所「に」の正答率と動作場所「で」→「に」の誤答率との間には有意な関係が見られなかった。仮説は支持された。

第 6 章では〈3〉を解明するために仮説の検証を行ったところ⑤中国語話者 179 人と⑥韓国語話者 90 人のデータ分析の結果、場所名詞が対比された場合の存在場所「に」→「で」の誤用は見られたが、動作場所「で」の正答率との間に有意な相関関係は見られなかった。また⑦中国語話者 40 人と⑧韓国語話者 84 人のデータ分析の結果、場所名詞が文頭に置かれた場合の存在場所「に」→「で」の誤答は見られたが、動作場所「で」の正答率との間に有意な相関関係は見られず仮説は支持された。

第 7 章では本研究の意義と課題を述べた。